

目次

一、アントニオの詩に捧げる詩 ^{うた}	木乃間 風人	5
二、相聞挽歌	柿末 猿麻呂 芦田 太君	13
三、燃え尽きしロマンの香り	宮沢 新樹	31
四、のぞき絵十一面回転美術館―玉虫浮見堂―	浜野 茂則	41
五、看護倫理学論外概論	細田 浩	61
六、原市沼周辺から	濱野 弘之	89
七、髑髏 ^{びくろ} と蟋蟀 ^{せせり} と一休と	茂木 光春	109
編集後記	茂木 光春	144

のぞき絵十一面回転美術館 | 玉虫浮見堂 | 浜野茂則

「とうとうやっちゃいましたね」

二人の人からそう言われた。何かとんでもないことをしてしまったような気がした。約三年もかけて奇妙きつれつなものを作ってしまったのだからそう言われても仕方ない。―「のぞき絵十一面回転美術館」―十一の扉付きのボックスの中の絵をのぞいては、自分でターンテーブルを回転させて、「見る」というものだ。最初の案は八つつの金網付の箱の中をのぞいてもらうという形のもだったが、木工作家のSさんに相談したら面白いですなと興味を持ってくれた。友人のMさんにこの企画を話したところ、金網でない方が絵が生きたと思うと言われて。そこで思い付いたのが、十一面観音にちなんで、十一の扉付きのボックスに絵をいれて巨大なマニ車のように回転させるといったものだった。「十一のボックスを円形テーブルに載せるなら大きくなりすぎますが8よりより円形に近くなりますから可能じゃないですか」とSさんは言った。こうして奇妙な物作りが始まったのだ。

私はその後十一の絵の構想で頭がいっぱいだった。私の「思い出、心の原風景、風土、歴史、記憶」と「夢、幻」と「現実凝視」この三つの分野の絵をターンテーブルに載せてくるくと回せば混とんとなって、天に昇って行くようなものになりたいと勝手に考えた。十一のボックスの上に屋根を付け、その頂上には天に向かう金色の桐の実装飾を彫金で、十一の屋根の先端には彫金の鈴を、そしてターンテーブルには十一のギボシ風の彫金ノブを付けることにした。

私はSさんにおおざっぱな原案を絵に書いて示した。「なんとかやってみます」と言った。私は来る日も来る日も少しでも時間があれば絵を描き始めた。何しろ十一の扉付きのボックスを絵で埋めるには5面×11で、55枚の絵を描かなければならない計算になるのだ。

Sさんも試行錯誤で、やってみなければ分からない所があるので遅々として進まない。私は公募展に出すつもりでいたので絵はほぼ完成させて、公募展の書類審査の資料作りに入った。Mさんの彫金、金物着実に出来上がって来た。「こんな立派な装飾金具を用意されると焦りますねえ」とSさん。書類審査の期限は迫っていた。十一ヶの扉付きのボックスのやそれらをおおう屋根の完成はしたものの下の円形ターンテーブルは一向にできな

い。完成したものを写真に撮ったりして資料として提出することはとうていできないと思った。製作過程の資料を整えて、完成予想図を提示すればそれでいいだろうと勝手に思い込んでしまった。そうこうしているうちにSさんは腰を痛めてしまった。完成写真は撮れないけれど完成予想図を絵に描いて他の絵も含めた資料をととのえれば応募できるからと言ったらSさんもほっとしてちょっと緊張がゆるんでしまった。つめが甘かった。中途半端なまま提出した資料の一部「作品概要説明」がこれである。

◆作品概要説明

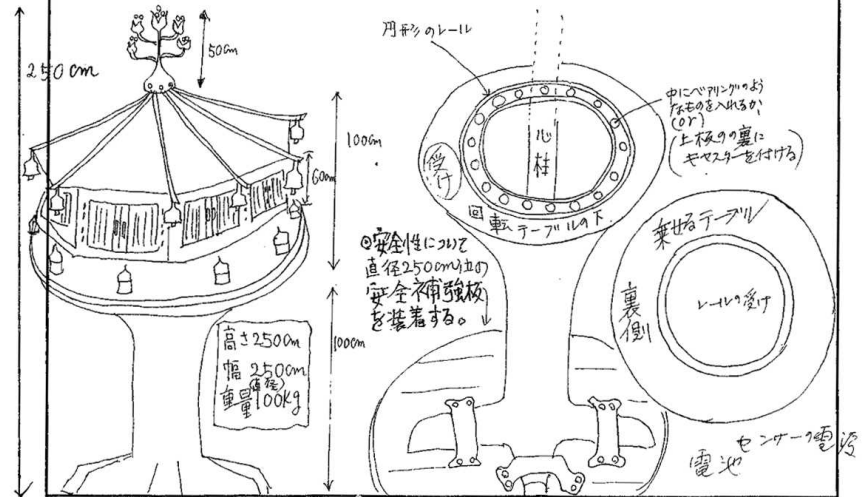
※作品の特色

- 行・ヨコ・奥行 約2m500cmを越す巨大な灯籠状の御堂に十一面の扉が付いている。
- 扉を開けて中をのぞくとセンサーが作動しライトが点く。そして中の絵画や文章を見てもらう。
- 一つ見終わったらまもとのしんちゅうでできたギボシ型のノコギリを握り回して次の扉の中を見る。
- 十一の扉を見終われば「心(真経)に張り付けられた「般若心経」と十一の扉根のタレの下に取り付けられた宝篋金輪(心林の中には「般若通照金剛」の文字が細く刻み入れ、外側には刻みが入っている)とが回り、同時に頂上の桐の葉も再生塔も回るのでもニ車のような功德があるというものである。絵と文章と全体をエンターテインメントと批評と祈りの表現を目指す。
- 十一の扉のうち全部(5面)絵になっているものが多く、下板に文章が書いてあるものや色紙や鏡があるものや79の「聖不や2女教」にはクインガ(紙で巻いている)ネギボシのネガリの人形がセットされている。さらに現更を照射する作品。4と5には金網の扉(これを開けて見よう)が付いている。

※十一面の扉の題名と見る川原番

- | | |
|-----------------------|------------------|
| 1 吉祥千手観音菩薩 | 6 庶民(烈)伝 (昭和原人) |
| 2 苦楛大地蔵菩薩 | 7 聖不や2女教会 |
| 3 こんぼろを見た | 8 かぐや姫の竹の子 |
| 4 護神王の御堂(この金網を開けて下さい) | 9 葉のほへる妹を憎くあらば |
| 5 平成の末法(この金網を開けて下さい) | 10 赤と黒の群像(ZAZEN) |
| | 11 破魔詔曲模様天受不息 |

作品の形状・寸法・素材等



○素材 木材・しんちゅう、塗料(アクリル)
一部(エンビハのフ、軽量鉄骨、パリング・センサー、レール他)

公募展は落選だった。何で、と思った。何で、とはあまりにも傲慢かも知れないが、前年「この金網を開けて下さい」三部作の資料を送ったところ、「今回は選に漏れましたが、あなたの作品は最終審査まで残りましたので次回を期待します」とコメントが付けられたので、その三部作も含めた今回の作品だったので期待してしまっただ分、落胆も大きかった。反省点は未完の作品資料を送ったこと、形としては東洋、日本の伝統的なものに頼っていること、絵画のテーマが不統一であることなどが挙げられるかも知れない。

しかし、私の内的欲求と絵画内容の必然性によって、のぞき絵という参加型の表現方法によるアート絵画になったのだという点は私の独自性であると確信を持っていた。

私は気をとりなおして、来年の個展までには完成させようと思った。その矢先、Sさんは様々なことが重なった疲労のためかヘルニアになってしまった。それでは急がせられない。そこで小休止していたら家庭の事情で遠方へ出かけなければならなくなったり、新しく頼まれ仕事などで年が明けてしまった。家族の者に「無理なんじゃないの」と言われて私は少々不安になってしまった。連絡をとると春までにはなんとかかしますと返事をもらった。そうこうしているうちに三月も半ばを過ぎってしまった。私はとうとうキャンセルしたいと言いだした。Sさんは「私はキャンセルしてもいいですよ」と言った。その言葉には自分はそれでいいけれどあなたはそれで本当にいいんですかという意味が含まれているニュアンスだった。私はちよっとムツときて、「七月の十五日から私の個展だから、じゃあ、七月初旬までにはできませんか」と言ったら「やってみます」と言った。それからのSさんの仕事ぶりはすごかった。日夜、少しでも時間があれば作業小屋に来て仕事を進めた。6月近くなった時「夕べ夜遅くまで作業してたら玉虫が飛んで来ました。今朝見たらエンピの心柱の筒の中に玉虫が入って死んでました」とSさんが言った。その後私も玉虫が飛んできてボックスの上の屋根に止まったのを見た。私の家には古井戸の近くに百年は経っている楠の木がある。そこから毎年「青スジアゲハ」と「玉虫」が飛び立つのだ。ボックスの扉の取っ手のデザインが決まっていなかったたのでこの玉虫にちなんで取っ手は玉虫の形状と図柄にすることにした。

十一のボックスを支える回転テーブルが出来上がった。「回してみて下さい」とSさんが言うので回したが、私の力ではほんのわずかしか回らない。Sさん「やっぱりムリか」と言ってから「重くて百kg以上の重さが下受けのテーブルにかかるのでキャストが木部にくい込んでしまっただけで動かないんです」と言う。私は「もう時間がない。仕方ない。今回は回らなくても、十一のボックス扉を開けて見てもらえばいいよ」と言い出した。「でも手で回わせるって案内状にも書いてしまったんでしょ」とSさん。「それはそうなんだ」と言った。しばらくしてからSさんは「なんとかします。回らない回転灯籠なんて話になりませんよ」と言った。それから車の中に入ったきりになって長い間あちこちに電話をしていた。そして数日後、「動きます」と言っただけでSさんにはこりした。私の非力な力でギボシ風のノブを持って回すとずっしりと思えば回転板がザーと波のような音を立てて回った。キャストと共にベアリング状態に置かれた沢山のビー玉の流動する音だ。これで一安心。しかし、下の脚が気になった。下支えは灯籠風の形状で、安全性を確保するため十字形の土台にさらに円形盤の木製安全補助体を付けるつもりでいた。しかし、しっかりと安全は確保できるものの何か足元がぼてぼてして納得が行かないのだった。私は急に変更を申し出た。「足元をとがった杭のような形の何本かの足で支えられないか」と言い出した。私はこれまでに御堂らしきものを描く時、土台の柱の先を逆さギボシ風にとがらせて表現することがあった。それがひらめいたのだった。「細い柱にして下さい」と言った。最初四本と考えたが、細いと百Kを超える重量を支え切れないかもしれないとSさんは言う。「八本、細い支え柱を立てる場所がありますが、細いと百Kとなると強度がねえ、鉄でもあれば別ですけどね」私は「鉄でいいです。鉄のとがった柱を赤い色を塗ればいいですよ」と言った。

個展の開催日ギリギリになって完成した。十畳二間の部屋に三分割りしてやっと運び込み、組み立てた。高さ約2.5メートル、回転テーブルの直径約2.5メートル。天井ギリギリだ。

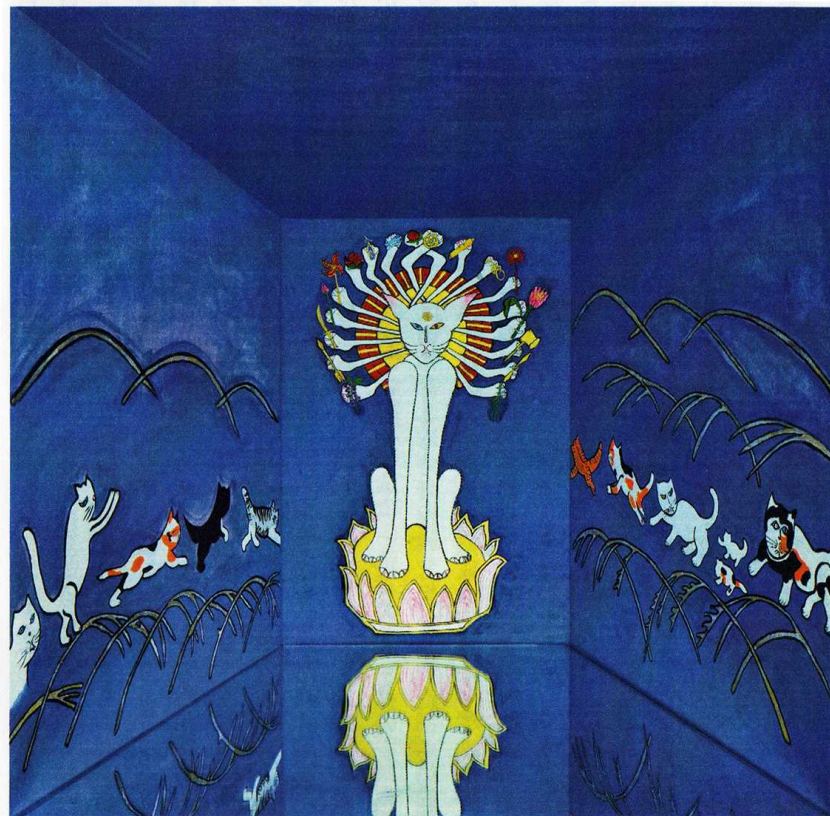
見に来た人は何ですか、これはと触っていいものか開けて見ていいものか、困惑して眺めるばかりだった。面白がってゆつくりとテーブルを回しては十一の扉を開けてのぞいて見てくれる人が増えた。そして見てくれた人が何人も面白い感想を述べてくれた。「この下に水を張れば竜宮城か、厳島神社みたいで面白いと思う」とか「上からつるせばユーフォーみたいで面白いね」とか「かつげるように長い横柱長柄をつけてみたら御輿になりますよ」とか言ってくれた。この作品が見る者に新たな創造の可能性を語らせる力があるのかと私は内心うれしくなった。

私はこの作品を通じて長い時間をかけて紆余曲折の果てに創り上げる物作りの不思議さを知った。物作りは生き物だと思った。最初の図面通りにきちんと作ったら自分の計画通りにできたと満足したかも知れない。しかし、ああでもない、こうでもないとして右に左に揺れながら試行錯誤して行くうちに自分が一番表現したかった内なる声が届いて来て自分でも全く想像してなかった着想がやってくるものだ。もたもたしているのは、一紆余曲折は一種の推敲なのだ。もしSさんが私の最初の計画通り進めていたらこの作品は誕生しなかったのだとも思った。そして個展が終わり、私の絵も一区切りつける所までやって来たなど一種の安堵感を覚えた。

しかしその後時間が経つにつれ、一区切りどころではないと思いはじめた。あの回転灯籠をくるくる回すたびにそれが混んとして心の中で掻き回され、私の心の原点、熟成の壺となって次々と新たなイメージが湧いてくるようになったのだ。ある地点に到達ではなかった。私の画道は緒についたばかりだったのだと思った。



2 苦拔犬地藏菩薩



1 吉祥千手観音猫



4 さる しんし ほろこう
 猿 紳士の彷徨



3. こんな ^{ゆめ} 夢 ^み を 見た



6 ^よ ^{みん} ^{れつ} ^{でん} ^{あゆ} ^{せんじん}
 庶民(列)伝-昭和原人-



5 ^{へい} ^{せい} ^ま ^{ほう}
 平成の末法



8 かぐや^{ひめ}姫の^{たけ}竹の^こ子



7 せい^{せい}聖^{ねぎ}ネギ^{おとめ}乙女^{むすめ}教会



10 ^{あか くら} 赤と黒の群像 (Zazen)



9 ^{むらさき} 紫のにはほる妹を憎くあらば



「のぞき絵十一面回轉美術館 —玉虫浮見堂—」



|| はま 破 魔 詔 曲 模 様 天 變 不 息